

授業実践力の向上を図るための若年研修の工夫と改善

～若年教員が自信をもって教壇に立てるように～

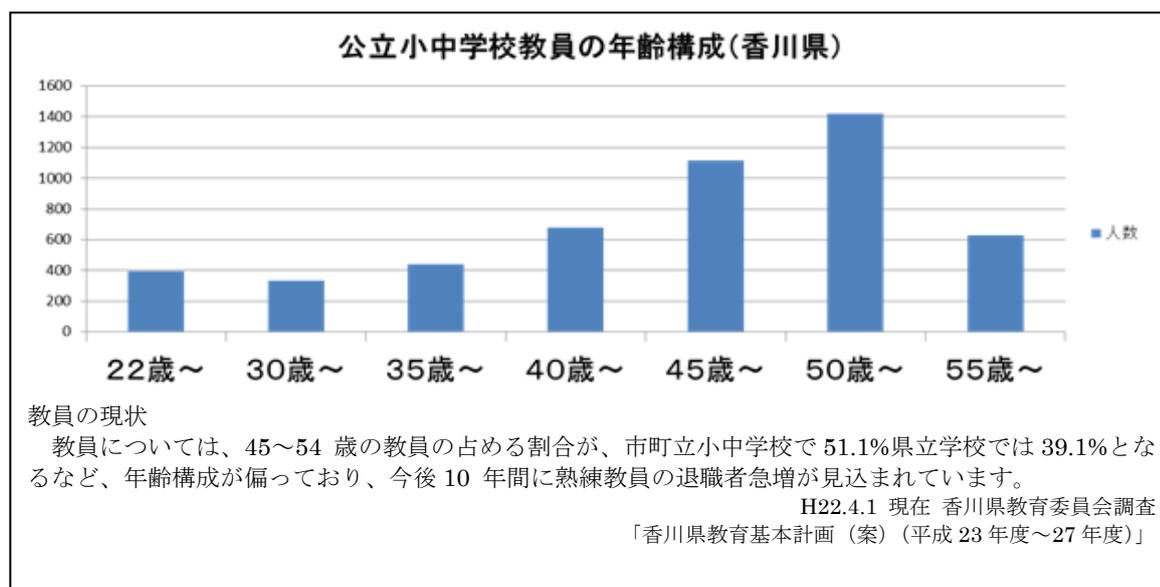
三豊市立詫間学校

〒769-1101
香川県三豊市詫間町詫間2158番地

<http://edu.city.mitoyo.lg.jp/takuma/>

1. 研究の背景

何故若年研修の改善が必要なのか。香川県では大量退職・大量採用の時期を迎え、「熟練教員から若年教員への指導力の継承」「若年教員の力量形成」といったことが喫緊の課題となっている。学校で中核となって学校経営を推進している管理職やベテラン教員からバトンを渡されるときが、そう遠くない時期に訪れようとしている。若年教員には、学校教育の改善・創造を自律的に推進していくことのできる教員としての力量を高めていくことが強く求められている。



2. 研究の目的

平成26年度、本校には教職経験3年未満の若年教員が5名在籍し、彼らの授業実践力の向上は学校教育目標や研究課題の達成に向けて必要なものである。平成25年11月に内3名へのアンケートを行い、「知りたい・教えてほしい」という悩みがあることがわかった。彼らは経験不足を自覚しており、そこから生まれる不安を抱えながら日常の実践を行っているようである。若年教員の実態から「自信をもって教壇に立ち、児童と接することのできる教員」を目指し、彼らの不安を解消し、自信を深める手立てを講じる必要性を感じた。その手立ては日常の実践や研修等において行わなければならない。そしてその手立ての中で「実態把握→課題整理→解決」を繰り返す。つまり日々の実践の中で具体的な問題を見つけ、解決のための実態を明確にし、手立てを考えて解決していくといった方法知を身につけていく。この方法知は、ベテラン教員はこれまでの教職経験で獲得しており、無意識のうちに日々の実践に活用していると

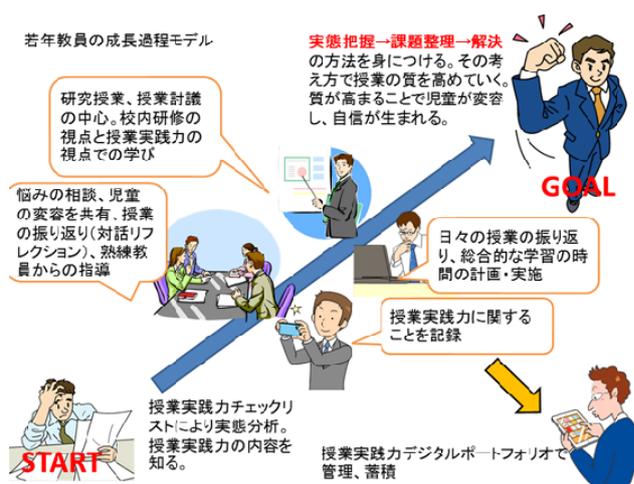
思われる。しかし、若年教員は経験が浅いことでこの方法知を身につけておらず、目先の事象に即時的に対応することに終始していると考えられる。この方法知を獲得することによって授業や学級経営の質が高まり、児童が変容することによって自信が生まれることが期待される。経験の浅い教員にとって有効性を感じ、活力を生み、「実態把握→課題整理→解決」という方法知を獲得することを通して授業実践力を向上させるような若年研修の工夫や改善を求めて主題を設定した。

3. 研究の方法

本研究において、若年教員には様々な場で学ぶ機会を設定する。しかし、「学んだだけ」ではその後の実践・活用・改善に活かされることは難しい。そこで、①学びを蓄積することができる、②学びの蓄積をすぐに活用することができる、③学びの蓄積を振り返ることができる、④自分以外の若年教員の学びの蓄積から学び、共有することができる、といった機能を備えた「学びのポートフォリオ」を準備することにした。上記の機能を備えたものとして、「コラボノート」(株式会社ジェイアール四国コミュニケーションウェア)を活用し、これを「授業実践力デジタルポートフォリオ」と名付けた。そしてアクセスできると共にそれ自身が学びの蓄積場所ともなるタブレット端末の活用を考え、公益法人パナソニック教育財団実践研究助成によりタブレット端末を確保した。

「実態把握→課題整理→解決」を繰り返す場については校内研修、個人研修を活用するとともに、新に若年研修会を設ける。校内研修、個人研修、若年研修会を中心に、日々の業務において「実態把握→課題整理→解決」を絶えず行う。そして、それぞれの学びを関連づけるために「授業実践力デジタルポートフォリオ」で管理・蓄積を行う。これら一連の活動を『若年研修システム』と名付けた。

本研究を契機として、校内研修、個人研修、若年研修会での様々な取り組みの中で敢えて手間のかかる「実態把握→課題整理→解決」を行うことにより学級が安定し、それによって時間が生み出されたり、自信が芽生えたりするという正の循環が発生すれば、それがまた次なる学びへの原動力になると考えたのである。



4. 研究の内容・経過

実践研究は日常の実践に加え、重点的な2回の期間を設け、『若年研修システム』の円滑な運用により、若年教員の授業実践力の向上を図る」ことを目的におこなった。第1期は4～6月(以後フィールドワークⅠ)、第2期は9～10月(以後フィールドワークⅡ)である。

フィールドワークⅠでは授業観察を通じた授業力向上及び学級経営の助言、若年研修会のコーディネートを通して仲間と学ぶ習慣作りを念頭に置いて実習を行った。具体的には、若年教員の授業観察と補助、総合的な学習の時間の補助、若年研修会(①※「授業実践力チェックシート」による自己診断と今後の目標決め、②学級目標作成に向けた、学級の実態を把握するためのワークショップ、③視点児童を決めた上での実態把握・手立て・変容についての話し合い、④指導教諭の授業をもとにした対話リフレクション)と「授業実践力デジタルポートフォリオ」の試行を行った。

「実態把握→課題整理→解決」という方法知を身につけて児童と接することで、学級経営にも授業にも良い影響を

与え、トラブルも減少し時間や精神の余裕が生まれることに繋がると考えた。しかし、学校現場では慢性的な時間不足や仕事量の多さで教員は疲弊してしまっている。そういった状況の中で、学級経営や授業構想において「実態把握→課題整理→解決」という手順や新たに導入された手立てはエネルギーや時間がかかり負担に感じることがフィールドワークⅠにおいて判明した。

フィールドワークⅠでの反省から、フィールドワークⅡでは若年教員全体に関わるのではなく、教職3年目の男性教員を中心に関わった。行ったことは、①授業を踏まえての省察の促し、②総合的な学習の時間の補助である。①は授業後に若年教員と振り返りの時間を持った。参観者がいることで授業の展開や児童の実態が複眼的になり、それを基にした振り返りは次時に繋がることが多く、授業改善への効果が高いと考えられる。②は単元の構想や準備、グループ支援を協力して行うことで、児童の興味を引き出し、探究的な活動を行うことができた。①②とも、若年教員は授業に手ごたえを感じる結果となったが、一人で「実態把握→課題整理→解決」を行うことは難しいと感じていることが判明した。

フィールドワークやインタビューから若年教員の実態を以下のようにまとめた。

○若年教員は目先の授業のことに中心に考えることが多い。先を見通せないで、不安になるとともに目先のことに集中している。

○インターネットで指導案や実践記録、実践映像を入手することができるので、先輩教員に尋ねず一人で授業プランを立てることが多い。教材研究も同様である。また、若年教員は先輩教員に尋ねることに抵抗感がある。相手も忙しい、申し訳ない、恥ずかしいという気持ちを抱えている。

○授業実践力の向上という観点で考えた場合、若年教員自身も現状のサイクルが効率的では無いとは実感している。

○若年教員の思考は常に「教える側」である。そのため、児童の変容等への着眼がない。

※「授業実践力チェックシート」

村川雅弘は「授業実践力向上を支援する総合的な研修システムの開発的研究(平成25年度～27年度)」において授業実践力を5層の枠組みに設定している。

第1層から第3層までは通教科的なものであり、第4層及び第5層の各教科に特化した授業実践力の基盤となるものと定義している。つまり、一般的に言われている「学級経営力」が第1層から第3層にあたりと考えられる。しかし、それぞれの層の具体的な内容は明らかになっていない。そこで、各種の文献から洗い出し、102項目を具体的な授業実践力として設定した。その項目に対し、4段階で評価できるものが「授業実践力チェックシート」である。



評価	分類	番号	チェック項目	すべて出来る	ほとんど出来る	出来ない・出来ない	ほとんど出来ない
学級文化創出力	安心	1	安心して発言できるように配慮している。	4	3	2	1
		2	友だちの発言を静かに聞き、失敗を笑わない約束ができています。	4	3	2	1
		3	疑問点やつまづきを抵抗なく出し合ひ雰囲気を作っている。	4	3	2	1
		4	明るく快活に児童に接している。	4	3	2	1
		5	グループ活動で児童一人一人に役割がある。	4	3	2	1
		6	児童の発達段階・友だち関係・家庭状況を把握している。	4	3	2	1
		7	メリハリのある態度で授業を行っている。	4	3	2	1
		8	児童一人一人に気を配り、言葉かけをしている。	4	3	2	1

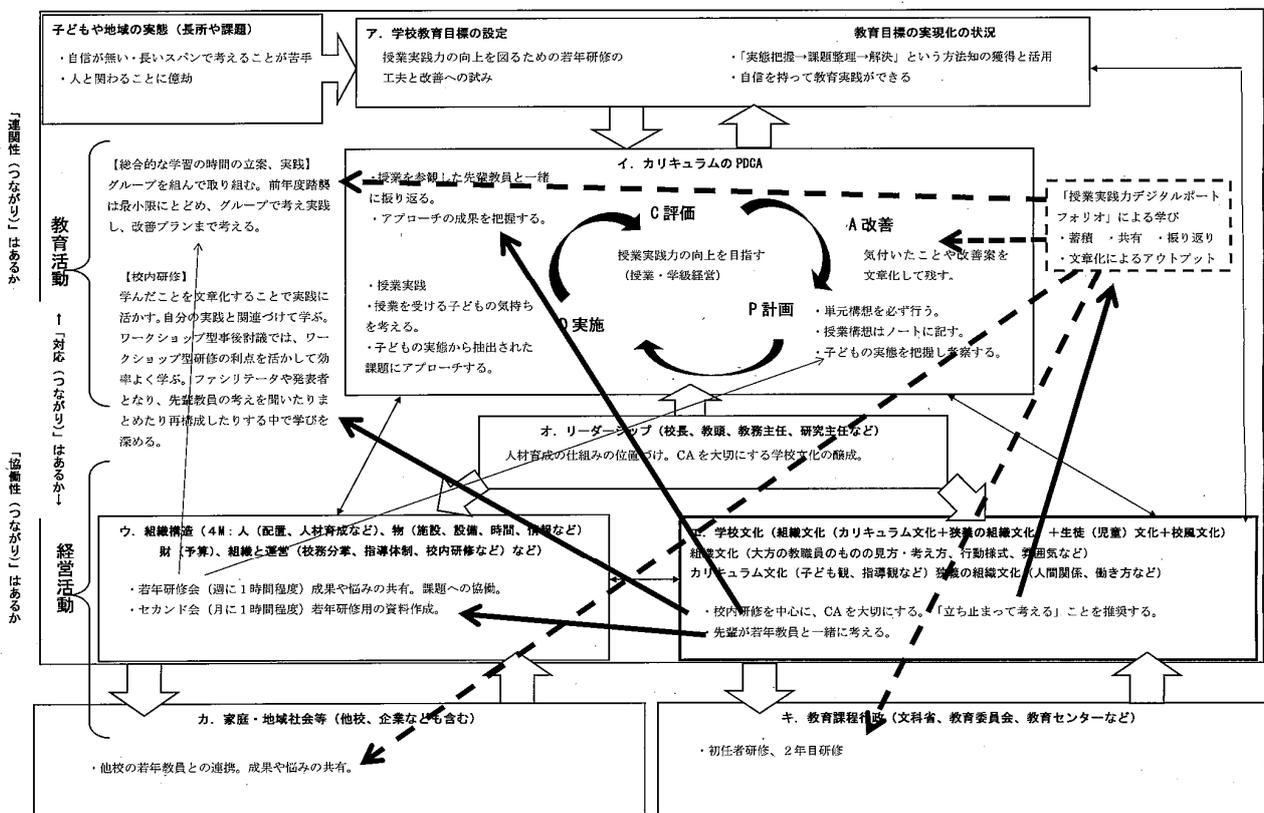
5. 研究の成果

「若年研修システムの有効性を問う」ことはフィールドワークではできなかった。原因として、①若年研修システムの妥当性、②若年研修システムと若年教員の行動や意識のマッチング、③若年教員を若年研修システムに導く基盤がある。これらの原因を考察した結果、「実態把握→課題整理→解決」というPDCAサイクルを学校全体で確実に回すことの重要性に帰結した。つまり、Dを繰り返す若年教員に対し、一緒にCAPを行う人間関係や学校文化の醸成こそが、『若年研修システム』を運用する上で欠かせないのである。

【『若年研修システム』改善プランの提案】

『若年研修システム』の基本形(校内研修、個人研修、若年研修会を柱に、「授業実践力デジタルポートフォリオ」でそれらを結ぶ)は維持しつつ、内容を少し変化させた。また、学校文化に言及した。全容をカリキュラムマネジメント・モデルに当てはめたものが下の図である。

『若年研修システム』は「授業実践力デジタルポートフォリオ」と「学校文化」の影響を大きく受けることが図から明らかである。よって、「授業実践力デジタルポートフォリオ」は内容の充実とネットワーク環境の早期整備が望まれる。また「PDCA サイクルを回す『学校文化』を醸成するために、校内研修の授業討議におけるワークショップ型研修の充実が望まれる。村川(2010)はワークショップ型研修の本質は「参加者が『共通理解を図る』『各自が持つ知識や体験、技能を活かし繋げ合う』『具体的なアクションプランをつくり実行に移す』『絶えず問題を見つけ改善を図る』『互いに力量を高め合う』」ということが研修の形態やプロセスに内在し～中略～望ましい組織の状態を形成しやすくなっている」「具体的な問題解決において、教職員一人ひとりの潜在力を引き出し生かし合うことにより、互いの『授業力』『教師力』が高まり、学校内に学び合いの文化が醸成される。その結果として『学校力』が高められていくのである」と述べている。つまり、ワークショップ型研修にはPDCAサイクルが内包されており、且つ、教職員の自律的な行動や協働を促進する機能があるのである。



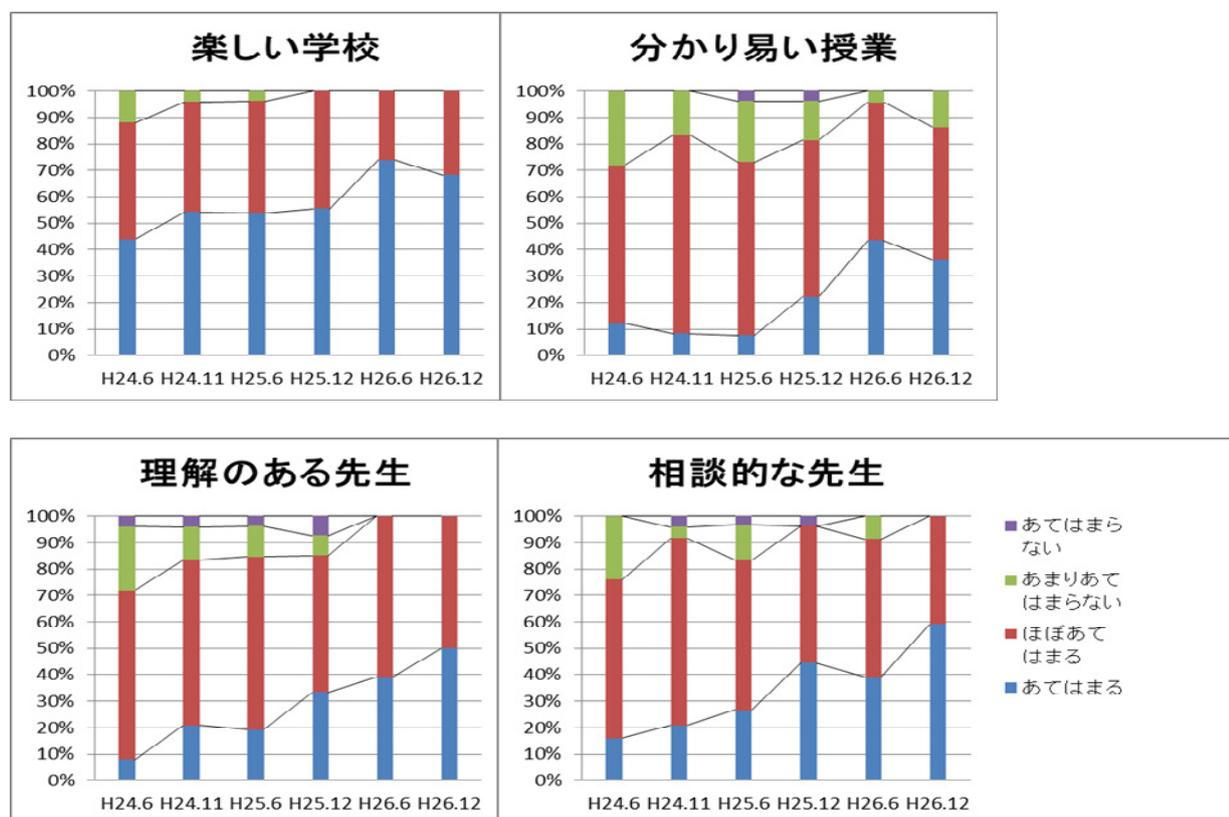
若年教員の授業実践力の向上を目指す上で、「学びを繋ぐインフラ(本研究では「授業実践力デジタルポートフォリオ」)の整備」と「学校文化を生み出すワークショップ型研修の充実」の2つに力点を置くことが望ましいことを指摘して本研究の結論とした。

6. 今後の課題・展望

託問小学校では年間2回、保護者アンケートを行っている。アンケートは 20 項目で、「あてはまる-ほぼあてはまる-あまりあてはまらない-あてはまらない」の 4 段階で評価するようになっている。ここでは

- ・お子さんは、楽しく学校に行っている
- ・お子さんは、学校での授業や活動が分かりやすいと言っている
- ・先生方は、お子さんのことをよく理解して、適切な指導をしてくれる
- ・先生方とは、電話や連絡帳などで、お子さんのことについて相談できる

の4項目について、教職3年目の男性教諭の数値を取り上げる。保護者アンケートは、保護者と学級担任、担任の学級での様子を客観的に知る数値として適当だと考える。



「楽しい学校」は平成 26 年6月に比べ、12 月の数値は減少している。また、「分かり易い授業」も同様の変容が見られる。本校は平成 26 年4月に隣校と合併し、全学級クラス替えを行っている。そして、仲間づくり等を全学級で丁寧に行ったためか、この教諭に限らず学校全体の数値が平成 26 年6月は 25 年の 12 月に比べ上昇していた。そのため、平成 26 年 12 月の数値は例年に近い数値に落ち着いた結果、減少したと考えられる。

上記のような条件を考慮して再度グラフを見た場合、「楽しい学校」「分かり易い授業」の項目は前年より上昇している。「理解のある先生」「相談的な先生」に至っては、26 年 12 月に上昇しているのである。これらのことから、授業実践力の向上とまでは断言できないが、少なくとも子どもや保護者からの信頼は着実に得られていると言えよう。これら

のことから、『若年研修システム』の効果は不明だが、当初の目的であった「若年教員の力量形成」には一定の成果があったと考えられる。

また、「授業実践力デジタルポートフォリオ」は自分の実践の蓄積を始めたところである。今後、蓄積を続けていくことでデータベースとしての価値が増すに違いない。なお、「授業実践力デジタルポートフォリオ」のために準備したタブレット端末であるが、若年教員はそれを積極的に授業で活用している。若年教員はタブレット端末のような最新機器に堪能である。彼らの手によって、授業での活用法のバリエーションが今後増えていくことを期待している。



このように、若年教員の力量やスキルは向上している。しかし「4 研究の内容・成果」でも述べたが、彼らは目先のことに汲々とし、PDCA サイクルの D を繰り返すことも実態としてある。「実態把握→課題整理→解決」という PDCA サイクルを身につけるための『若年研修システム』とそれを支える学校文化や学びのインフラの充実が今後の課題である。

7. おわりに

パナソニック教育財団の研究助成によって、「授業実践力デジタルポートフォリオ」の基盤を作成することができた。現時点で「授業実践力デジタルポートフォリオ」はまだ効果をあげているとは言いがたい。しかし、今後データの蓄積が増えてきたり、振り返りに活用したりすることでその有効性は増していくものと考えられる。研究助成によって、若年研修の工夫と改善への第1歩を踏み出せたことを感謝したい。

< 参考文献 >

- ・香川県教育基本計画(案)(平成 23 年度～27 年度)
- ・村川雅弘編集(2010)『「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える』教育開発研究所
- ・村川雅弘・野口徹・田村知子・西留安雄編著(2014)『「カリマネ」で学校はここまで変わる！続・学びを起こす授業改革』ぎょうせい
- ・村川雅弘(2013)「授業実践力向上を支援する総合的な研修システムの開発的研究(平成 25 年度～27 年度)計画書」